

お人形と夢、それから。

鈴木理恵子



世界はとても残酷だ。

人間は皆平等だとか自由だとか、そういう思想を説いて回っているやつらもこの街に居るけれど、そんなのは嘘っぱちで綺麗事だ。そういうやつらはただそうやって嘘を売り歩いて、権力が欲しいだけ。

私は知っている。人間は皆、醜くて汚い生き物だということを。聖母みたいに見えるやつだってただの偽善者で、金と権力に目を光らせながら毎日を生きている。私と何も変わらない。

もしかしたら私は彼らと違って生きている権利もないのかもしれないけれど、それ以外は同じ。つまはじきにされているけれど、なんとなく、生にしがみついてしまっている。

未知のものへの恐ろしさは、計り知れない。だから、弱虫だから、私はいつも死ねない。

「ねえ、お兄さん今晚どう？」

金が、欲しい。

プライドなんて捨てたのはもう何年前のことかしら。ただただ今日を生きるため、明日を拝むための金を手に入れるだけ。そのためだけに、この死んだ街に足を踏み入れる男たちを妖しい言葉で誘い込んで股を開くの。

お願い、私の邪魔をしないで。

ハッと意識が浮上して目の中に入ってきたのは、どこまでも続く白。何もない、天井だった。

何が起こっているかわからない。ここはどこ。起き上がろうとして、腰に鈍い痛みが走った。

「イツ……」

いつもと違う感覚。床が、硬くない。冷たくない。

これはベッドだ。ふかふかとした綿が私のことを包んでいた。視線を上げると左側にあるカーテンの隙間から光が差し込んでいて、興味本位に手を伸ばすと大きな朝日が出迎えてくれた。

太陽の光を浴びたのはいつぶりだろうか。

大抵起きると夜でそこから仕事に行く。私は起きた時間が朝だと思っているから、こうしてお日様の光を浴びた最後の記憶は、もう思い出せないほど遠い過去だ。

私は、都合のいい夢でも見ているのだろうか。だってこんなの、ありえない。私が屋根のあるところでベッドの上で目覚めているなんて、現実にはあり得るわけがない。

もしかして、死んだのかもしれない。そうだとしたら、思ったより死は快適なものだな。もっと早くにホテルの屋上から飛び降りておくんだった。

「目が覚めましたか」

いきなり背後から声が聞こえて、反射的に振り返るとそこには栗色の髪の男が立っていた。

「元氣そうで良かったです、もしかしたら目が覚めないかと思いましたが」

「……誰」

馴れ馴れしく話しかけてくるけれど、私はこいつを知らない。はずだ。もしかしたらずっと昔の客だったかもしれない。毎日毎日いろんな奴が来てくれるのだから顔を覚えてないことくらい許して欲しい。ああでも、一度

シたら思い出すかもしれないけれど。

「そんな怖い顔をなさらないでください。美しいお顔が台無しですよ」

「そんなお世辞いららない。あんた誰だと言ってるのよ。あと、ここはどこ」

嘘をついていますと言わんばかりの顔で褒められても嬉しくないし、話をはぐらかされるのは心地いいものではない。本当はもうこいつと話すのをやめてどっかへ行ってしまいたい。でも今私が情報を得られるのは、こいつからだけだ。もしかしたら何か恨まれていて、私をこうやってとらえて拷問でもするつもりなのかもしれない。生きるためにいろんなことをしてかしているから、恨みの一つや二つ買っているもおかしくない。

「そんなに怒らないでください、昨日街の外れの一角で暴行事件が起きて、あなたはそこで血を流して倒れていたんですよ。覚えてないのですか」

「あ……」

思い出した。

昨日は金払いの悪い集団の客を引っ掛けてしまったのだった。終わった後にやすい札を三枚握らされたのだが、昨日はその五倍の金額で話をつけていた。お前たちがその値段で私の体を買ったんだろうといえば、覚えてないだの、こんな程度でそんな金が払えるかだの言われたから頭にきて殴りかかってしまったのだ。基本的に客に手を上げてはいけない。お客様は、神様だ。でも昨日は本当に金に困っていたのだ。その日の稼ぎ次第で私の明日は決まるのだ。必死になって何が悪い。だがしかし多勢に無勢、しかも非力な女一人では何もできず、ゴミ捨て場の近くの泥の水溜りに捨てられていたというわけだ。

ああ、やっと死ねたと思ったのにここはどうしようもなく現実だった。

「あんな治安の悪いところ、もう近寄らないほうがいい」

「あそこは私の家だ!」

「……失礼」

「お前に何がわかる」

ああ、もう。お前に何がわかるっていうんだ。同情心から私を助けて、いい人ぶりたかっただけでしょう？人間なんてそうだ。みんなそうだ。優しさを振りまくのは全部自分のためのコマを作るための演技で、本当は腹の中で笑っているに違いない。捨てたと思っていたプライドが、少し、残っていたようで彼に対する嫌悪感が大きくなっていく。

「そもそも勝手にここに連れて来てどうしたいの。治療代なんて払えないわよ」

臓器でも売らない限り、そんな金はない。でもこんなやつに病院に売り飛ばされたからと眼球一つ差し出したなんてしたくないし、見目が悪くなれば今後この職で生きていけなくなる。そんなことになるくらいなら舌を噛み切って死ぬ。

「大丈夫ですよ、僕が負担しますから」

にっこりと微笑む顔が憎たらしい。偽善者め。貧しい者を助けた気になって優越感に浸る金持ちめ。そんなことで私を助けたつもりなのだろうか。そんなことを私が望んでいるとも思っているのか。

白衣を着たナースが扉を開けて入ってくると、それでは僕は、と言って部屋から出て行ってしまった。あいつの顔も声も、もう二度と見たくないし聞きたくない。

私はその日の夜に病院を抜け出した。ここが一階でよかった。

「ここは危ないと言ったでしょう……」

「仕事の邪魔をしないで頂戴」

なぜ、また会ってしまったのか。というか、なぜここにいるのか。視界にもう二度と見たくないと思っていた栗色が眩しいほどに入ってくる。ここはこいつが言った通り治安が最高に良くない場所で、私の職場で、私の家だ。起きてから寝るまで私は暗闇に紛れたこの街で息をひそめながら生きている。そのことは伝えただけだし、だから私がここにいるのは当たり前だろう。そんなところに、どうして。

「あれからあなたが大丈夫かどうか心配で」

「それはそれは。こんなんでも申し訳ないわね」

今日は、何も釣れなかった。何の収穫もなかった。だからゴミ箱を漁っていただけだ。だからこのあいだとは私の中ではわけが違うのだが、一般的な人から見ればどちらもゴミだまりに頭を突っ込んでいる頭がいかれている奴だろう。

「お体の方は」

「ねえ、なんで私の心配なんかしているの？ あんたこそこんなんどこに来るべきではないわ」

こういうおぼっちゃまはこの住人の格好の餌だ。少しでもここにいれば身ぐるみ剥がされ全財産取っていかれるだろう。そして彼はここがそういうところだと知って、来ている。本当に頭がおかしいのはこっちの方だと思ふ。

「あんた、死にたいの？」

「まさか。貴方は死にたいんですか？」

「いいえ、死は怖いものだわ」

死にたくないけど生きたくもない。それはなんてわがままな願いだろう。

「だったらここを出るべきだ」

「出られるんならとつくのとうに出てるわよ」

「だったら僕が」

「いや、施しはいらぬ。そういうの嫌いな」

自由に生きたいと、こんなゴミみたいな場所から出たいと何度も思ったことがある。でもそれは人に可哀想だと同情の目を向けられながらそいつの満足感を満たすためにまでして望む行為じゃなかった。だったら私はこの街で生きて、この街で死んでやる。

叶わない夢は、みないほうがいい。

彼は私を買ってくれるわけではなかったけれど、度々私のところに来てくれた。価値をつけて商品にしてくれないのには少し腹が立ったけれど、私と話をしてくれる人なんて今までいなかったから、それは純粹に嬉しかった。

た。いつも大体夜明け前、早朝、私が一仕事終えた後かカモが捕まらずに落胆しているところに彼は現れた。名前も歳も、素性は何にも知らない。相手も私について春を売っていることしか知らない。でもそれくらいだからこそ生まれる信頼関係というものもあるのかもしれない。多分これがそうだろう。

この不思議な関係は、何となくやらだらと続いていた。でも彼が突然来なくなっても私は心配しないし、私がある日どっかの親父のペットになっていたとしても彼は何も言わないだろう。多分表情にはものすごい嫌悪感にじみ出るだろうけれど、他人の生き方を否定するような人ではないということは知っているから。

「私、可愛いお人形みたいになりたかったんだ」

あの時は酔っていたんだと思う。いや、酔っていた。出会って一ヶ月記念だとか言って彼がシャンパンを持ってくるから。街角で開けたら他の浮浪者たちに殺されるからと近くの公園で、紙コップで乾杯をした。久しぶりの酒はうまかった。

もう随分前に捨ててしまったけれど、三歳の誕生日にお母さんがくれたお人形。フリルのレースがひらひらとたくさんついていてお姫様の服を着て、にっこりと笑っていたお人形が私は好きだった。その後すぐにお父さんとお母さんが離婚して、私はお母さんに手を引かれて家を後にしたのだけれど、その後の生活は散々だった。とにかくお金がなくて、借金にまみれた私たちの元には毎日のように借金取りが来るし水道は止められるしで、生きていく意味がわからなくなったのはその頃だ。

いつも怖い時は、その人形の手を握りしめていた。私がこの子だったら良かったのになあと思いながら眠りについた。

だってお人形は、痛みも寂しさも感じないのだから。いつも素敵なお洋服を着て、可愛い可愛いと褒めてもらえるのだから。私だって、女の子なの。綺麗なものやふわふわしたものが嫌いなわけではない。

しばらくしてお母さんは死んでしまったけれど、餓死だったのか、殺されたのか、自殺だったのか、お母さんの最後を私は覚えていない。だってその時私は、すでに家にいなかったから。

「乙女みたいで驚いた？ もうどうでもいいんだけどね」

「……私なら、あなたの夢を叶えて差し上げることができます」

「何を言っているの」

「お人形みたいになりたいのでしょうか？」

「……ほんとうに？」

彼は、私の手を取って歩き出した。

「すっ……ごい、器用ね」

彼は私のことを家に招いたかと思うとダイニングテーブルの椅子に私を座らせて、目の前に真っ白な粘土を持って来たかと思うとなれた手つきで形取っていった。そうしてみるみるうちに、一人の女の子がそこに姿を現し

たのだ。粘土だと思ったそれは立ち上げたメレンゲで、彼はメレンゲ人形を作っていたのだ。

彼は丁寧にその出来立ての女の子をオーブンのところまで持って行って、焼き上げ始めた。

ブオンという音を立ててオーブンが動き始める。これが女の子に命が宿る瞬間なのかもしれない。

「私は、父の病院の跡取りでした」

一通りの作業を終えると、彼は手を洗いながら自分の話を始めた。彼の方から口を開いて自分の話を始めるのなんて初めてでびつくりしたけれど、返事をする気が起きなくて、静かに彼の話を聞いていることにした。多分これは、私に話しかけているのではないと思うから。

「私、医療のことよりお菓子作りの方が好きだったんです。手先は器用なんですけど、いかんせん興味のないことって頑張れなくて。すぐに皆の興味は弟に向かされ、社会的な私の存在意義は無くなりました」

女の子の好きそうな、砂糖が焦げていく甘い香りがキッチンから漂ってくる。それはとろけるように私の周りを取り囲み更に酔わせて、私たちから正常な思考を奪い取っていく。

だからもういいかな、と思ってしまった。多分それは、彼も同じだったのだろう。

「存在しなくてもいいのに生きているって、辛いことなんですよ」

「それは、……わかるわ」

「……ほら、できた」

オーブンから焼きあがったメレンゲ人形はとっても可愛くて、私が夢見ていたようなドレスを着てにっこりと笑っていた。ああまたこの笑顔に会えた。これは、私だ。彼が私のことを仕立てて、可愛いお人形にしてくれたのだ。

でもこれだけ可愛く着飾っても、彼を除いて、誰も私のことを見てくれない。存在を認めてくれない。やっとなりたいたいお人形になれたのに、なりたかったものと何かが違うの。

私、何で生きていたかわかった気がする。この夢を叶えたかったんだわ。そして、夢は叶ってしまった。

でも何か、物足りない気がする。

「貴方は自分の社会的地位がなくなったって言っていたけれど、私なら認めるわ。だってこんな素敵なものを作り出せる能力があるんだもの」

「そういつてくれるのは貴方くらいですよ」

彼と話している間も人形のことをじっと見つめて、目を合わせて、レース柄のスカートを見て、人形をじっとみていて、わかった。私がいるからいけないんだ。物足りないんじゃないやなくて足り過ぎているんだわ。このままでここに私が二人いることになってしまう。この人形は微笑みながら、どうしてお前は生きているんだって、お前はもう頑張って生きなくてもいいじゃないかって囁いてくる。

彼が私の隣の椅子にどっしりと腰掛けた。その顔はとてもどんよりしていて、こんな繊細で美しい作品の作者とは思えないような表情をしていた。

「僕、もう疲れちゃって」

「奇遇ね、私もよ」

彼の膝の上にあつた手を両手で握ってあげる。

私、男の人と接するのは貴方が思っているよりもまいのよ。

「……よろしければ、一緒に死んでくださいませんか」

「ええ、よろこんで」

ああ、やっと、やっとだ。ずっと欲しかったものを、この人はくれた。手にするのが怖くてたまらなかったものを、この人は一緒に抱きかかえてくれた。ああ、私は今日ここで死ぬために生まれて来たんだ！

もうお金なんていらぬ。私は本当にやりたいことを見つけたの。一日一日なんていうちっぽけなもの、もういらぬ。

もしかしたら彼は初めから私を誘うつもりで助けたのかもしれない。彼も私と同じ弱虫で、一人で生きるのをやめることへの抵抗があったのかもしれない。でもそんな理由、どうだっていい。ただの後付けの推測に過ぎないものは、あってもなくても同じなのだから。目的が一緒なら、それでいいじゃない。

彼が倉庫から取り出してくれたガソリンを二人で頭からかぶって、家の中にもばらまく。リビングの奥の小さな部屋に仏壇があったから、そこにあったマッチを拝借する。もう返す予定はないけれど。シュツという音とともにポツと赤い灯がついた。ゆらゆら、ゆらゆらと揺れ流様はまるで私を写しているようだった。

「怖い？」

彼が私の隣で小さく囁いた。それはここが無音じゃなかったら聞こえないほどの小さな小さなものだった。

「いいえ」

私はもう、決めたのだ。むしろ楽しみで心の中が踊っている。

細いマッチを手からつると落とせば、床につく前に気化していたガソリンと反応してポツと音が立った。もうこれを落とす前には戻れないけれど、私は満足だ。引火して大きくなった炎はぼうぼうと言いながらぶわっとう全体を包み込むようにして広がった。ああ、暖かい。暑い。そういえば家ごと失くしてしまうから、せつかく作ってくれた砂糖のお人形も、今日でこの世界にお別れだ。ごめんなさいね、私の代わりだったはずなのに。でも、これも運命なのよ。二人この世にいたら多すぎるけれど、二人ともいなくなってもなんの問題もないから、なんにも心配しなくていいのよ。

もう何もかも、やめてしましましょう。生まれ変わったなら、可愛い本物のお人形に、なれますように。

世界は今日も輝いている。

あのね、私、あなたが好きなの。でも私には恋をする権利がない。

ふわふわ、ふわふわ、夢のよう。もしかしたらこのお話も夢物語かもしれない。

スポンジケーキのような頭の中。ふわりとしたクリームのような心。氷砂糖のような眼玉。

砂糖をかけてかき混ぜて。卵と牛乳も混ぜたら、オーブンできつね色になるまで焼いてしましましょう。

甘い甘いチョコレートをかけて召し上がれ。

生まれて初めて、恋をした。

それは絵本や漫画で描かれるような衝撃的な出会いでもないし、何かしらの事件があったわけでもない。ただのいい人から片想いの相手に変わった理由も特にない。気がついたら惹かれていたのだ。ある時ふと、もしかしたら好きなかもしれないと思うと、そこから自覚するまでそう時間はかからなかった。

気が付いてしまえば、その想いは麻薬のように頭から足先まで支配して、甘い蜂蜜のように私の心を溶かしていく。それはもう止められなかった。いや、止めようとも思わなかった。

「最近まんざらでもない様子だけど、どうしたのよ」

同じ職場にいる友達は恋バナが大好きだから、こういうことを嗅ぎつけるのも早い。隠すことでもないし、好きな人ができたと打ち明けると私以上に喜んでくれた。

「ついにお前にも春が来たのかー!」

「なんか言い方がおじさんみたい」

「で、相手は誰なのよ」

私の指摘も聞こえないかのように、ずいずいと前のめりにくる。ううん、無視しただけかも。

「いつもチーズケーキ買っていく常連さん」

毎週私のお店に来てくれる、常連の男の子。夕方に来店して、この店自慢のチーズケーキを一つ、あるいは三つ買って帰る。一つの時は自分用、三つの時は家族に買って帰ってあげるのかなと考えると微笑ましい。

この話をしている自分は顔が赤くなってしまっているかもしれない。耳まで熱く火照っているかもしれない。でも仕方ない、恋をしてしまったのだから。

町の小さなケーキ屋さん。

そこが私の働く場所。

毎日多くのいろんなお客様が来る。子供の誕生日のためのホールケーキを買いに来るお母さん、ここのレーズンクッキーが一番好きなよと褒めながらいくつか買って行ってくれるおばあちゃん、ピアノの発表会用にとお菓子の詰め合わせを購入していくお父さん、ふらりと立ち寄って今日のおやつを買っていく女子高生。そして、

毎週夕方にチーズケーキを買いに来る男の子。

恥ずかしそうな、焦っているような、各々違った顔をしてここのお店に来るけれど、帰るときはみんな嬉しそうに去っていく。

私も、ここにいられることが幸せだ。

だからこのお店は、魔法のお店なんだと私は思っている。

お店にいと、お客さんはよく褒めてくださる。とっても綺麗で可愛いと。でも見向きもしないでショーケースのケーキだけを見ている人もいるし、急いでクッキーだけをつかんでいく人もいる。あの男の子はいつも注文するものが決まっているからか、まっすぐレジのところに来て、目的の品を買って、幸せそうに帰る。

なのにこの日は少し違って、お店の中に入るとクッキーやプリンの並んだ棚にまず足を運んで、それからケーキのショーケースの前に来た。モンブランやショートケーキなど、いつもは目もくれないケーキたちをまじまじと見て「美味しそう」と呟いた。

その時、聞きなれない声が聞こえて来た。これは、彼の声じゃない。

「すごい！どれも美味しそうで迷っちゃうー」

栗色のボブカットの女の子が、男の子の陰からひよいと出て来た。全然気がつかなかった彼が誰かと一緒にこのお店に来たのは初めてだ。ずっと男の子しか見てなかったから、その陰にもう一人いるなんて、思わなかった。彼が誰かと一緒にこのお店に来たのは初めてだ。友達だろうか。いや、もしかしたら……、とも思ったけれど、この後は考えないようにしようと思う。知らなければ幸せでいられることもあるだろうから。

「ねえねえ、オススメとかある？」

「僕はここのチーズケーキが好きだな」

それ、オススメとかじゃなくて、いつも買ってるやつですよ。それしか食べてないですよ。

彼女の腕が彼の方へ伸びて、絡まる。こっちに近づいて来てくれたから、顔がよく見えるようになった。ああかわいい、私よりかわいいかもしれない。

「うーん……今日はモンブランの気分かなあ」

「はいはい」

「んもうごめんって！次はチーズケーキにしよう」

彼女の我儘をめんどくさそうに、でも耳を傾けてあげる彼は、モンブランを二つ購入した。ばかり。

彼と目があった。そういえば、初めて目を合わせてくれたかもしれない。私は一方的に毎日彼を見つめていたけれど、それも気持ち悪いけれど、見ゆれずにはいられないのだ。でもいつも彼はケーキに夢中だから、こっちを見てくれたことにちよっと心が踊る。

「かわいい」

微笑みながらそう言って、彼は一緒に来ていた女の子と帰って行った。

なんてことはない陳腐な台詞。の、はずだ。今までいろんな人から言われていたけれど、彼からの言葉は特別だった。体がじんわりあったかくなっていくようで、全身が興奮しているのがわかる。

こんな言葉一つで馬鹿みたいだって、わかっているけれど私は馬鹿だから仕方ないのだ。

「珍しいですね、ホールケーキをご購入なんて」

「実は、彼女の誕生日なんです」

そうなんだ、そんなこと、初めて聞いたわ。

「あ、それとこれも、お願いします」

私は彼に買われた。♠号のホールのショートケーキと一緒に。甘いクリームと母がたっぷり乗った特別な、うちでは相当高い方の代物だ。そんな商品と一緒に私は買われた。

彼の持つケーキボックスの中の主役はそのケーキで、私ははじっこで体育座りをしながらうずくまっていた。ゆらゆら、揺れる。まるで波のように寄せて引いてを繰り返して、私の心の中みただなあと思った。いつかは捨てられてしまうか買われていく運命だったのだから、好きな人に買われたのなら良かったのではないだろうか。でも、失恋して間もなく買われるなんて思ってもなかったのだ、彼にどんな顔をむけたらいいのかさっぱりなのだ。

この箱が開かなければいいのに。

そう思っていたけれど現実残酷で、どうやら目的地に着いてしまったらしい。横の壁が開いて、眩しい世界に引っ張り出される。

外に無理やり出させられて初めて見たのは、あの女の顔だった。

「わあこれかわいい！ 本当のお人形さんみたい。砂糖菓子でできるとは思えないわ」

「かわいいよなあ。こないだ目があった気がして、買おうって決めてたんだ」

そう。そうなの。この間、目があったの。私、とっても嬉しかったの。結ばれたいなんてそんなの最初から思っていないし無理だっけわかってる。でも、夢を見るのを諦められなかったの。こんなだったら、人形に生まれてこなければ良かった。

「○○、誕生日おめでとう」

いいな、いいなあ。私も人間に生まれたかったな。砂糖人形なんかじゃなくて人間に生まれていたら、あなたと話すこともできたし一緒に歩くこともできたかもしれないのに。誕生日おめでとうと言ってももらえたかもしれないのに。私には製造年月日と賞味期限があるだけだ。人間たちが持つような綺麗な記念日、私にはない。

私がケーキの真ん中において、周りにはろうそくが突き刺さっている。端からひとつずつ、点灯式が始まった。

私の目の前にはあの女がいて、感動しきった様子でいる。そういうばあなとも私を可愛いって言ってたわね。そ

れだけは認められた気がして嬉しいのでこれからも誇りにしていこうと思った。

これからがどれだけあるのかは、知らないけれど。

「ありがとう」

栗色の髪の女は顔を真っ赤に染めて、男の子がつけてくれたろうそくにフウツと息をかけた。でもその風は弱すぎて、炎は少し揺れただけだった。周りが全部燃えているから、暑くてたまらない。早く消してくれないものか。

何回か息を吹きかけられて、周りの火は全部なくなった。女がスマートフォンで私をばしやりと撮り、男の子とも一緒に写真に収めた。私は消えて無くなりたかった。こんなところにおいても惨めなだけだ。なのに私はこの二人を祝ってあげることが強要されている。

ああこれが、人形としていきたいと臨んだ末路だなんて。私こんないやよ。可愛い可愛いとチヤホヤされて愛でもらえるお人形になりたいと願っていたのに、そうなれたはずなのに、なんでこんなにも苦しいの。ああ、恋をしたのが間違いだっただわ。私はお人形でみんなの夢が詰まってるはずなのに、夢が夢を見るなんて許されない行為だったんだ。でも私は、恋をしてしまった。だからこれは、罰なんだ。

このパーティーが終わったら、私はゴミ箱に捨てられて、誰にも覚えてもらえないまま死んでいく。それはさみしいことだけれど、未練を残さず消えていけるのなら本望だって自分に一生懸命言い聞かせる。

次はまた、人間として生まれてきても悪くないかもしれない。そのときは可愛くって身長が少し低めの、栗色のボブカットが似合う女の子にしてくださいな。